農山漁村の魅力ある開発手法を探る

—地域文化資源を対象として—

Research on Useful Method of Rural Development
—Resources of Regional Culture—

白 井 彦 衛*

Hikoe SHIRAI

I 農山漁村における活性化研究の

視点について

1 地域広がりと人口の関係

今日、全国には3,245の地方自治体（昭和62年）があるが、そのうち655が市制を施行しているから、残りの2590は町と村である。ここで町と村を「残りの……」と表現したが、その表現は言葉のあやにすぎず、町村数は全地方自治体の79.8%を占めていることになる。又、市部の中に農山漁村（以下農村と総称する）があるのだから、日本の国土377,835km²の大部分が農村であると言えよう。そのことは、農村が都市に比べて所得や文化の点で劣位の状況にありながらも、次に記す地域的な広がりの中にみる資源的優位性に関するかぎり、農村は都市より圧倒的に良好な条件を持つと言える。すなわち、農村の魅力の基盤となる、山稜、河川、峡谷、湖沼、海岸、植物、動物等の自然的資源は、人口に関係なく農村の山野に存在する。又、耕作地、農産物、伝統行事、人情等の人文的資源も農民とともに存在する。これら地域資源の特徴ある内容は、農村の特性として郷土の誇りになると同時に、観光客等、都市人の注目するところとなる。

これに対して、人口については都市の優位性が指摘されるのも事実である。すなわち、全国の市部人口が85,538千人（この中には農村人口を含むのだが）、町村人口が28,179千人であるから、市

部人口は全人口の75.2%を占めていることに注目をしなければならない。すなわち、地域資源の中でも文化的なもの、例えば、美術館、音楽堂、図書館、学校等の開設のためには、支持人口が多い方が有利である。又、民芸、郷土芸能、特産物の活性化や保存にも同様なことが言える。人口が多ければ、資金や施設規模、需要と供給等の諸点について有利となるが、人口が少なくなれば、それらの点で不利となる。

しかし、人口の大小についてももう1つの側面があることに注目してほしい。それは、地域資源は移動できないのに対して、人間は移動するという特性がある点についてである。つまり、農村は人口が少なくても都市人が旅行という行為により、農村を訪れることができる事であり、その行為の主たるものを観光レクリエーションと呼んでいる。

いま、農村の魅力ある開発手法を探るとき、「地域」の広がり重点をおくのか、それとも「人口」の大小に重点をおくのかという理念上の問題がクローズアップされるが、結論としては「地域」か「人口」かの二者択一の方法でなく、資源の存在性では地域的広がりが、資源の利用性については人口の大小が重要であり、農村の開発には、地域的思考と人口的思考が補完しあいながら、総体としてはバランスのとれた開発の手法が必要と言えよう。

2 地域文化資源という視点

これより農村の地域資源のうち、特に「地域文化資源」に焦点をあてて、農村の活性化のあり方

*千葉大学園芸学部

を考えてみたい。地域文化資源の定義は次節に記すとして、この種の資源の重要性は、人間が付加価値をつけることにより、資源の「質」が大きく変容することである。その点、原則的には変化しない自然資源と異なる（人為的に変化したものは文化資源とみなされる）。例えば、耕地は人間により自然を改造したものだから文化資源であるが、そこで生産された米麦も当然文化資源であり、更にそれに付加価値をつけた料理も又、文化資源である。又、同様に付加価値をつけたことにより農村の活性化に役立つ事例は、加工食品、郷土料理、民芸品、民家、庭園等、その種類は極めて多様である。

地域文化資源という分野は、将来、新しい学問領域を形づくるものと筆者は考えている。その理由は次に示す諸点にあると言えよう。すなわち、①対象となる資源が図1のように広範囲であり、1つの資源の専門家のみでは対応できず、学際的、かつ Comprehensive な思考が必要であること、それは新しい分野の領域と専門家の誕生を意味する。②地域文化という呼称する資源なるが故に、農村地域のみならず都市地域をも含める資源の創出、その需要供給対策を解決する必要があること、それはプロジェクトチームの編成による多面的な調査研究の必要性を意味している。③諸資源の活性化にあたり、これまでのように生産技術中心の姿勢から文化（付加価値）創出という地域づくりの思想が必要になっていること、それは基礎から応用にいたる一貫的な研究と対策の必要性を意味している。

この分野における研究活動の現状について記しておこう。一村一品運動等、地域おこしが叫ばれて以来、研究と事業の推進者は、主として地方自治体と生産者有志であった。研究者の多くは事業に注目し、分析はするが積極的な提言がないという批判、具体的には「総論のみで各論がない」という表現が地域おこしの現場で聞かれる。現場では乏しい情報や技術で問題の解決にあたっている。

地域おこしの諸活動は今世紀中活発に展開されるであろう。この分野の研究者としては、現場の声に耳を傾けながら、新しい活性化手法の開発、新しい学問領域の形成に努めるべきものと考え

る。

筆者は、地域文化資源の活性化という視点から、これまでの研究の一端を記すこととした。

Ⅱ 資源文化資源の概念と

類型化について

1 地域文化資源の概念

「地域資源」という呼称は、農村計画の分野において定着しつつあるように思うが、「地域文化資源」というと現状では未だ耳馴れない呼称かも知れない。先ず、その定義から始めよう。

地域文化資源は、「地域」、「文化」、「資源」という3つの言葉による合成語である。

「地域」の概念は、「地方」が「中央」に対する用語であり、政治的匂いがするのに比べて、「空間的広がり」を重視するものである。従って、地域は町村部だけではなく都市部をも包含する概念である。東京も1つの地域として存在する。但し本文は農山漁村に限定している。

「文化」の概念は、「人間が理想を実現していく行為」を指しており、本稿独自の主張をするものではない。強いて言えば、理想の実現というのが大切なものであり、人間の行為であっても環境の破壊や低俗な遊びは文化と言いがたい。

「資源」の概念は、「人間の生存に役立つ素材及びその加工物」であり、通常、自然資源と人文資源に分けるが、地域資源について言えば、農産物、耕作地、温泉地、スキー場等、自然と人文の中間型、というより合成型の資源が多いこと、又、素材のみでなく付加価値をもつものを含めることに注目すべきである。

さて、上記3つの用語を1本化した「地域文化資源」の定義であるが、さほど難しく考える必要はない。地域文化資源は、「農村や都市において住民が作り上げた文化的な創出物である」と言うことができる。従って、地域文化資源に自然資源を加えれば「地域資源」になる。問題となる点は、地域資源を細分化する過程、つまり、中分類のところで、自然資源と人文資源に峻別できないところにある。それは、前掲の資源の定義でふれ

たように、自然と人文の中間型の資源があり、今日、農村にあっては、中間型資源が補足的にあるのではなく、主体的にあることである。そこで地域文化資源の立場としては、「人文資源」+「中間型資源」を取り扱いの対象とみるのである。

2 地域文化資源の分類

次に、農林水産物や祭り・イベント等、何百種あるか分からないほど多様な地域文化資源の中から、筆者が昭和63年本学会の大会で発表した内容に若干加筆し、一覧表に取りまとめてみたい。

分類は次の3段階による。

第1段階 特産物、郷土技芸、生活環境、人材

第2段階 農産物、郷土料理、民芸、伝統芸能、イベント、歴史風土、共用施設、住居、宿泊施設、慣習

第3段階 第2段階の細分化

図1にみる特徴は次のとおりである。

第1点は、多様な資源を「特産物」、「郷土技芸」、「生活環境」、「人材」の4項目に整理したの是一応の成果とみたいのだが、問題は残っている。例えば、民芸品は特産物だという指摘がある。ここでは芸術性を評価して郷土技芸に入れたが、特産物に入れた方がよい場合もある。

第2点は、第3段階より下をどれだけ細分化す

図1 郷土文化資源の総括図

べきかである。穀物は米・麦・粟等に区分され、米は更にコシヒカリ・ササニシキ等に細分できるからである。果実についても同様である。

第3点は、素材と加工品をどこで区別するかである。干しいたけは素材か加工品か、乾麺は農産物としては加工品であるが、郷土料理からみれば素材である。他にも複雑な事が澤山でてくる。

第4点は、文化の質が問題になる。農村にある全ての社寺・住宅・庭園を地域文化資源にするかどうか、又、それをどのような基準により決めるのか等議論の余地がある。

以上記したように、総括表だけでは判然としないので、次に、ふるさと情報センターの資料を引用しながら地域文化資源の特徴を調べてみよう。

3 事例についての検討

ここでは、西日本と東日本の中から1つずつ代表例を示し、図1との関係、又、両代表例の特徴について調べてみる。代表例は、西が久万町（愛媛）、東が岩館村（福島）であり、いずれもこの10年間、地域おこしに熱心な町村である。

表1～2について、次の相違点に留意してほしい。すなわち、図1と表1、表2とは観点が異なるのである。図1によれば、資源名は、一般的であり、抽象的である。つまり、特定の品目や特定の場所を規定していない。それは、英語の不定冠詞<a, an>又は<a kind of>により表現する、普通名詞により示される。これに対して、表1、表2によれば、資源名は、場所や品目を特定しているから、固有名詞であり、それは定冠詞<the>を付して表現できる資源名である。

次に、資源の取り上げ方についてみると、図1は前掲のように、場所を特定しないが故に、文化的な資源の全てを網羅しているが、表1の久万町、表2の岩館村は、それぞれの地域特性をだしている反面、両町村とも図1の資源の全てを持ちえない。誤解のないように付言すれば、「地域特性をだすためには、図1の全ての資源を持つ必要がない」と言えよう。なお、久万町、岩館村の資源リストには自然資源が含まれている反面、民家や学校が含まれていないので、地域文化資源というより、「地域的」+「観光的」リストと言えよ

表1 久万町の事例

項 目 名	名 称 等
ふるさと産品	久万山漬
ふるさと会員制度	久万高原ふるさと会員 「高原の香り」
合宿・研修所等	農林業体験実習館
農林水産加工実演・教室等	クラフト教室
伝統的な祭り等	久万林業まつり
イベント・行事等	ふるさと村秋まつり
温泉	古岩屋温泉
郷土料理	炭火で焼く久万牛、 しいたけ
宿泊施設	ケビン
寺社・教会	大宝寺
名勝・景観等	名勝古岩屋
展示館等	山村歴史館
観光農園等	りんご、栗、梨、きのこ、 とうもろこし
自然休養村等	久万高原自然休養村
テニスコート	久万公園
体育館	久万公園
グラウンド等	久万公園
フィールドアスレチック施設	ふるさと旅行村トリム
キャンプ場等	ふるさと旅行村
ハイキングコース等	四国のみち
登山	皿が嶺
プール	久万公園
スキー場	久万スキーランド
文章情報	憩いとやすらぎの里久万高原

表2 館岩村の事例

ふるさと産品	栃の蜂蜜、山菜、キノコのビン詰、館岩の赤かぶ漬物、木工品
住宅地・別荘分譲	ペンション分譲
合宿・研修所等	アストリアロッジ
伝統的な祭り等	湯ノ花神楽、豊年祭り（統一村祭り）、歳の神、三番そう
イベント・行事等	第5回日刊スポーツ杯スキー大会、田代山々開き、第4回溪流釣り大会
温泉	湯ノ花温泉、木賊温泉
郷土料理	イワナの刺身
宿泊施設	会津アストリアホテル
名勝・景観等	森沢の大杉、湯ノ花の舞台
釣り	前沢の曲り家集落
森林公園等	湯ノ岐川、西根川、鱒沢
テニスコート	たかつえ林業体験実習林 アストリアテニスコート
ハイキングコース等	しらかば公園
登山	唐沢峠
スキー場	大嵐山、田代山、帝釈山
文章情報	会津高原たかつえスキー場 秘湯めぐり、湯ノ花・木賊（とくき）温泉。館岩のふるさと、 前沢曲り家集落 オールシーズン的一大スポーツランド

う。

次に、久万町と館岩村の地域資源を表示し、その特徴を比較してみよう。

農産物についてみると、久万町が久万山漬を、館岩村が栃の蜂蜜、山菜、赤かぶ漬物、木工品を掲げており、両町村それぞれ郷土の特徴をだしていると言える。漬物は共通であるが中身は異なっている。（久万町は木工品を掲げていないが現地には産している。）

郷土料理についてみると、久万町が久万牛焼を、館岩村はイワナの刺身を掲げている。しいたけは農村共通の産品であり、料理である。

郷土技術についてみると、久万町がクラフト教室を、館岩町はリストにはないが木工品加工所があり、両町村は同程度の水準にあると言える。

その他、特徴ある点を列記すると、宿泊施設として、久万町が自然休養村、ふるさと旅行村、古岩屋温泉を、館岩村は湯の花温泉、木賊温泉、会津アストリアホテルを掲げている。公的宿泊施設については久万町が、温泉については館岩村がそ

れぞれ特徴を持っている。又、歴史風土については久万町が四国霊場「大宝寺」を、館岩村が山村の住居「曲り家」、「神楽舞台」集落を有している。その他詳細な点は省略するが、表1、表2から、それぞれ地域づくりにかける意欲を汲みとることができる。なお、未来への姿勢として、久万町のキャッチフレーズは「憩いとやすらぎの里久万高原」であり、館岩村のそれは、「オールシーズン的一大スポーツランド」である。

Ⅲ 農村の活性化に何が問題なのか

1 地域文化資源の立場

農村には以上記したように多彩な地域文化資源があるにもかかわらず、農村は都市に比べて、所得や文化の面で劣勢の状況におかれている。反収の限界や外国からの輸入に所得が伸び悩んでいる。作業の内容が厳しいため後継者に恵まれな

い。子供達の進学にも不利である。農村にはもはや「農村に住んでよかった」という時代は来ないのであろうか。農村がかかえる多くの問題点の中から、ここでは地域資源を活用し農村を活性化する場合何が問題になるかについて記す。

地域文化資源の立場からすれば、大別して、①農村地域と都市地域との関係、②農村地域内部の問題とがある。

(1) 農村と都市にみる文化資源上の特異性

農村は、都市では得られない、豊富な自然を基盤として文化資源を開発し、保存してきた。しかし各種資源をみると、施設の規模、特産物の生産高等、都市に比べて小規模で、家族的な雰囲気を持っている。祭りやイベントにしてもどちらかと言えばstaticである。これに対して、都市のそれはMan-madeであり、Dynamicであり、Uniqueである。農村が必ずしも劣っているというのではない。人間に必要な静けさ、緑の山野、やさしい気質等日本のオリジナルな特質はかけがえのない資源であるが、見かけのきらびやかさは都市が優位となっている。農村の若者が都市にあこがれる理由がその辺にあるのだろう。一億円ふると創生もいいが、農村における文化の理想像がいま問い直されている。

(2) 農村内部にみる文化資源の悩み

農村内部の文化資源の質と活用方法が様変わりしつつある。ここでも単なる一村一品運動でなく、地域文化の問題点を記す。

① 域外者の利用が多くなり、地元民対策が欠除しがちになること

村おこし、ふるさと活性化、自然休養村、都市交流等の事業は、地元住民へのサービスから都市住民を主とする域外者へのサービスに移り変わりつつある。それはつまり、外向きの地域文化資源の創出という傾向になって現われている。地元住民も又、域外住民の域内消費により地元への所得増加になるとして歓迎する傾向がある。

② 文化資源の供給過剰が問題になりつつあること

山岳や湖沼等の自然資源は再生産できないが、農産物や工芸品、キャンプ場やスキー場は生産したり、創出したりできるところに問題がある。つ

まり過剰供給という問題である。「一村一品」運動に刺激されて、域外者用の製品の生産拡大や文化施設の開発が多く農村において進められている。利用する域外者に限りがあるから、おのずと供給過剰現象がおきつつある。つまり、売れないもの、利用しないものを造っても、農村の振興にならないというジレンマがある。

2 観光レクリエーションをどう見るか

地域文化のあり方を探ろうとする時、観光レクリエーションとの関係を再考することが必要となる。両者はどこが異なるのだろうか、先ず、行為面（資源面は後で）の相違を峻別して記せば、「地域文化の担い手は地域内の住民であり、その成果（恩恵）は地元還元されなければならない」と言えるし、「観光レクリエーションは観光客（主に域外者）の行為なのだから、観光資源は観光客のために存在する」と言うことができよう。いま筆者自身がそのように記しながらも、地域文化と観光レクリエーションがこれほど明確に峻別できるかどうか、いささか疑問があるので、両者の相違点、共通点を具体的に検証してみたいと思う。

次に、資源面から見れば、前掲図1の中の主要な資源、例えば、郷土料理、民芸品、伝統芸能、イベント、歴史風土等の資源は、重要な地域文化資源であると共に、その大部分が重要な観光資源でもある。ということは、行為面を除けば、資源面では共通点が多いということになる。つまり、同一の資源を地域住民と観光客は異なる眼で見ているように思えるのだがどうだろうか。もちろん同一の資源を地域住民用と観光客用に意図的に区別して作る事例があるが、それは論外である。

従来、「文化は高尚だが、観光は低俗だ」とする風潮があるようだが、その見解は完全に間違っている。何故ならば、観光とは「国の光を観る」という崇高な概念があり、それは観光が文化の1形態であることを意味している。観光の一部にこれまで低俗な面があったにせよ、その1側面だけを見て全面を評価するのはナンセンスであることを知るべきである。

現実には、民芸品や郷土料理を評価する事に関

し、観光客が地元民より優れている場合がある。地元民は地域文化資源だからと言って、安直な日用品を観光客に販売したり、観光客向けの安易な商品を製造するのは、地元民・観光客の両者にとって益のないことである。地域文化資源と観光資源が一致するためには、地元民が手塩にかけて育て上げ、かつ風土特性がにじみでた内容をもつものが、客観的に評価される事の必要条件となる。

Ⅳ 地域文化資源の創出事例について

昨今、多くの農村において活性化の施策が講じられている。その活性化対策の中から、ここでは、農産物、民芸品、共用施設の3分野の最近の動向を取り上げてみよう。多種の資源中から将来のあり方にかかるヒントが内蔵されているかも知れない。

1 農産物について

近年、一村一品運動に見られるように、農山物の開発が各地で推進されているが、その特徴としては、穀物、果樹、野菜、原木、鮮魚等、その素材を商品として出荷するのみにとどまらず、それらに付加価値をつけた2次製品が都市住民の支持を得ている点を指摘しておきたい。農産物の中でも漬物、麺類、酒類が各地域の特性を生かしているのが目立つ。「野沢漬」は成功例の古参であるが現在でも新鮮味を失っていない。山菜を利用した塩漬、味噌漬、粕漬が近年よく出回っている。

麺類の中でも「そば」は我が国の伝統的食品として全国に普及している。同じそば粉を用いながらも各地で好をこらしたそば料理が盛況になっている。「うどん」は何と言っても「讃岐」が伝統的だが、最近では「よもぎうどん」、「ささうどん」と言った他種の粉を混ぜた新種のうどんが出回っている。ほかに麺類では「喜多方ラーメン」、「盛岡冷麺」が注目されつつある。

酒類の豊富さという点では、我が国は世界にさきがけている。日本酒、焼酎、ウィスキー、ワイン等多種がある。日本酒は特に銘柄が多く、新潟の「三梅」は有名であり、他にも多数の銘柄があ

る。焼酎が最近急成長し、ワインも堅実に伸びている。「ベリー酒」、「またたび酒」は山村で開発された新種の果実酒である。

田畑、果樹園が活性化に貢献した事例が多い。

「もぎとり」、「直販」、「会員制」、「オーナー制」、「リース制」、「市民農園」、「体験農業」がそれである。

勝沼（山梨）のブドウ、大子（茨城）のリングゴは、もぎとりや直販で成功した事例である。但し、もぎとりや直販は近くに需要者としての都市住民がいないと経営しにくいのは当然である。それに対して、会員制、オーナー制、リース制は都市から遠距離にあっても成り立つ経営形態である。特別に成功したという事例を知らないが、静岡のミカン、千葉のナシ、寒河江のアウトウ等事例は多い。市民農園や体験農業も盛んになりつつあるが、どちらかと言えば、都市近郊の方が利用者にとって便利である。

2 民芸品について

ここでは伝統工芸を含めて考えることにする。農村にはこれらの分野に、名人、名工といわれる人達がまだまだ健在である。経済成長期以前にはもっと多かったのが、代表的な事例として、手すき和紙・一刀彫・提灯・凧・釣竿・桜皮細工・陶器・織物・うちわ・傘・筆・だるま・人形・漆器等、数えあげればきりが無い。民芸、工芸品はどちらかと言うと新しさより古さを誇っているものが多いが、近年、若者がこれらの分野に乗りだし、新製品の開発に努めている。

前掲の民芸品以外に各地の珍しい民芸品としては、温湯の〈ずくりこま〉、鯉沢の〈雨畑硯〉、松枝岐の〈曲げ物〉、妻籠の〈わら馬〉、添畑の〈ロクロ細工〉、戸隠の〈竹細工〉、井波の〈欄間〉、成羽の〈神楽面〉、川上の〈ひるりみの〉、山鹿の〈紙灯籠〉、豊後高田の〈凧〉などがあるが、他にも澤山の民芸品がある。又、和紙、陶器、漆器は全国に勝れた質を持つものが多い。

今後、町村の民芸品づくりに問われる点は、他所の模倣でなく、郷土のオリジナリティ、本物志向の精神を持つことであり、それらの開発と保存のためには、「匠の村」等の施設が重要な役割を

担うことになるのであろう。

3 共用施設について

共用施設には各種あるが、中でも「郷土博物館」は、町村の文化度を示す指標になるため、その存在は極めて重要である。郷土博物館に求められる姿勢としては、単なる民具の収蔵所としてではなく、テーマ性のある「特化した」博物館であることが必要なのである。郷土の特色をもつ博物館としてであり、次のようなものがある。

石炭博物館・炭鉱生活館（夕張市）、行刑資料保存館（月形町）、アイヌ資料館（平取町）、鯨博物館（牡鹿町）、鉱山歴史館（鹿角市）、金山資料館（相川町）、武蔵武道館（大原町）、武家屋敷館（高梁市）、切支丹資料館（平戸市）、「元寇」歴史民族資料館（鷹島町）等であるが、この他にも玩具、織物等の民芸・農村漁村の生活をテーマにした郷土博物館が数多くある。今後一層の充実が期待されている。

V おわりに

前述のように、農山漁村には地域的特性に根ざした資源が数多くある。それらの諸資源は関係者の努力により鋭意開発中であり、3,000を超える地方自治体の資源開発が軌道に来るならば、次世紀には「現代のジバング」が到来するという見方すらある。しかし農山漁村における今日的な悩みは、諸資源の開発途上にあり、その恩恵が地域住民

の全てに等しく還元されていないところにある。それは問題点の項目で指摘したように、単に諸資源の開発のみでなく、農政全般の問題として解決しなければならないことも忘れてはならない。

しかし、地域文化資源開発の前段階で未開決の問題があるとは言いながら、地域文化資源の開発にそうした問題を乗り越えながら前進しなければならない。その事は、本学会のシンポジウムにおいて、農村にかかわる Sein の問題が解決しないうちに、Sollen の課題が突出しすぎるのではないかという、研究姿勢が問われているにもかかわらず、魅力ある農村の創出という事業の立場からは、やはり、未開決の問題を克服しながら、諸資源の開発と保存をより積極的に推進しなければならないと思う。そしてその先発地域ではそれなりの実績を世に問うていることに注目すべきであろう。いま、本学会員の中でこうした分野に関心のある有志は、魅力ある地域文化資源の開発手法に関し、基礎的研究や事業企画の支援をすべき時機が来ていることに注目すべきであろう。

以上、この小文の全般にわたり、わが国における地域文化資源の現状とその課題について記してきたが、これまで都市に比べて劣勢を指摘され、地方と呼ばれた農山漁村地域は、潜在的に力強く健康のように思われる。いつの日にか、文化の発信地だった農山漁村が、地域文化資源の充実により、文化の発信地としての発展を願うところであるが、それは単なる夢なのであろうか。夢としてでなく一歩一歩実現への道を歩みたいものである。